
ディスト・アウター 退魔士の少女と魔を統べし少年

アルファド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デイスト・アウター 退魔士の少女と魔を統べし少年

【Nコード】

N8694S

【作者名】

アルファド

【あらすじ】

デイスト・アウターそれは神への反逆者であり、世界の運命や未来を変える者達の事だ。かつて伝説の魔王と呼ばれた魔王もデイスト・アウターであった。魔族退治の専門家 退魔士の少女 エリアは魔王を倒すと決めていた。そんな彼女に教会から緊急の魔族討伐の指令が来る。相棒のシユウと共にいつも通りに魔族を倒して帰ってくるはずだった。魔族達の目的は伝説の魔王を復活させることだった。二人は力及ばず、魔王は目覚める。魔王と出逢ってしまった事でエリアの運命は大きく変わってしまう。世界のデイスト・ア

ウターが集いしとき、この世は崩れ去る。

今宵も退魔士は戦う

プロローグ 『今宵も退魔士は戦う』

「シユウ、敵勢力は？」

少年は望遠鏡から燃える村の様子を窺っている。

退魔士、魔族退治の専門家の私達は今宵も魔族と戦う。

「合計……2体だ、C級で槍を担いだ奴と無装備が1体ずつだな」
「分かった」

私は疾風の如く走り出した。シユウが私を呼びながら叫んでいるが気にしない。

風の魔法を使いさらに加速する、私は退魔士の中では珍しい類の一人だ。

魔法使いでもあり、退魔士でもあるのだ。本業は退魔士だけど……。

漆黒の修道服がなびくたびに聖剣の柄が鈍く光っている。
剣も感じるのだろう闇の者がいる事に。

村の入り口に辿り着くと少女に向かって槍が飛んできた。
「吹き飛ばすは木の葉！！ 狙い撃て、シヨット！！」

素早く詠唱して、槍目がけて無数の風を放つ。
風が槍に掠めた。

軌道のそれた槍は少女の目の前に深く突き刺さった。

「退魔士力、厄介な奴ラガ来タナ」
目の前には二本角の魔族が仁王立ちして立ちふさがる。

「エリア・オーシャンこれより魔族討伐任務を開始します」
魔族は左手を槍に向ける。

次の瞬間、強力な磁石に引き寄せられるように槍が奴の手に収まる。

エリアは攻撃がいつ来ても対応できるように剣を構える。

二人の間に見えない雷光が飛び散る。

同時に走り出し、お互いに刃を触れ合わすたびに金属がぶつかる音が何度も耳に響く。

「退魔士ヨ、塵トナレ！！　　デイス・オブ・テンラチュア・ドライド……」

魔族の足元に紫の魔方阵が浮き上がった。

槍に黒い光が集まり、エリアに向けて撃つ。

紫の一線がエリアの頬を掠めた。強化魔法の類か……。

第2撃が飛んで来た、それを純白の剣でエリアは斬った。

「何故ダ！？　　我ノ魔法デ貫ケナイ物ハ、コノ世界ニ有ル筈ガナイ……」

魔族の言う通りかもしれない、今斬ったのは弱った魔法だ。

対闇魔法の剣、テラス・セイバー。闇魔法を弱める力を持つ剣だ。

「来世では、退魔士の武器ぐらい調べておくことをお勧めします」
無残に残虐に彼女は言った。

その声はとても冷たく魔族の背中を凍りつかせた。

エリアが一步近づくとたびに、魔族は後ずさりする。

「来ルナ！！　　我ニ近ツクナ！！」

だが魔族の嘆きに反して少女は薄緑の髪を逆立たせて迫る。

また一步、魔族とエリアの距離が縮まる。

「来ルナ！！　　来ルナ！！　　コレデモ食ラエ！！」

第3撃目はもう簡単に弾かれてしまった。

少女は感情の読み取れない虚ろな朱色の瞳で魔族に言った。

「ごめんなさい。私、貴方に情けをかける事は出来ない」

刹那、魔族の胸部に剣が刺さった。

深く、深く、刻み込むようにエリアは刺した。

しかし魔族の腕が小刻みに震えながらエリアに最後の抵抗のように呟いた。

「……………退魔士……………今ハ安心デモ……………シテイロ、イズレ同胞ト主君……………」

言い終える前に魔族は塵となって消えてしまった。

主君……魔王の事か！

エリアは無意識の内に塵を何度も踏みつけて、死んでしまえと何度も叫んだ。

こんな姿、シユウに見られるわけにはいかない。

今のエリアの眼には絶望と怒りが入り混じり、憎しみに満ちた酷い顔になってるに違いない。

落ち着いて、いつもの無口で不器用な少女に戻る。

シユウはたぶん、もう一体を倒している頃だろう。エリアはシユウの元へ走り出した。

その時にエリアの首に着けていたロザリオのネックレスが不意に落ちた。

両親の形見だ。

エリアは魔王が大嫌いだった。

かつて風の国と呼ばれた国があった、その国は魔王に抵抗したから滅ぼされた。

その国の生き残りである彼女は目の前で母を殺され、父はエリアを守りながら死んでいった。

だからエリアは決めた、魔王を潰すと。

その為に退魔士になり、少しでも強くなる為に魔法を覚え、最近ではさらに攻撃手段を増やす為に天使まで調べている。

全ては魔王を殺す為に、親の仇を討つために。

父が母に送った大切なロザリオ。

ロザリオを握り締めながらシユウの元にたどり着いた。

シユウには無茶ばかりするな！！と叱られたが、エリアは少しだけ綻ばせ微笑んでいた。

今の彼女にとってこの時間が楽しかった。

心配してくれる人がいる事に。

今宵も退魔士は戦う（後書き）

初投稿のアルファドです。

自分、作家を目指しています。

誤字脱字に出来ていない所をビシバシ言ってもらえるとありがたいです。

忍び寄る影 01

第1章 忍び寄る影

夕方ほどエリアが落ち着かない時間は無い。

犬歯を剥き出して落ちかけている太陽を確認する。

「エリア少しは落ち着いたらどうだ？ お前らしくも無いぞ」

「……ごめん……」

「謝らなつて、お前の気持ちも分からねえ事もないからさ」

シユウは焚き火に薪を入れて魚を焼いている。

森の中で野宿なんてしたら魔族に襲つて下さいと言ってるようなものだが、私達なら問題ない。

テラス・セイバーに太陽の力を蓄えておく。

つかの間の休息、日没が開戦の合図だ。

魔族にはランクが存在する。上から順にS、A、B、C、Dの5段階だ。

S級とA級にはまず会う事は少ない、魔界に殆どが移住してしまつたからだ。

森の中に潜むならC、Dが基本でB級がボスで出現する。

だが太陽がある限り奴らは尻尾すらも見せる気は無いだろう。

夜の者は太陽に弱く一ランクほど弱体化してしまう。

退魔士の多くが昼夜逆転したバカが多いけど、人々の命を守る為に戦っている。

「エリア構えろ、2分後に完全に沈む」

太陽を確認するともう見えないに近い位置まで沈んでいた。

森がざわめき、動物達が怯える恐怖の時間がやって来た。

カラスの鳴き声さえも聴こえ無い。

そして、日が完全に姿を隠した。

「我ラノ森ニ入りシ侵入者ヨ、生キテ帰ル事ナド、考エルナヨ」

不気味な声が森の奥から響いた。

「まさか、もうボスキャラのお出ましか？」

エリアはまた無鉄砲に走り出した。

シユウの声など聴こえていない、ただ動く殺戮兵器の人形のように虚ろな瞳で大地を駆け抜ける。

「一人になるな！ エリアあああああ！！」

追いかけてようとするシユウを阻むように魔族たちは笑いながら立ちふさがる。

「邪魔だ、どけえええええ！！」

聖水を振りまきながら、退魔の拳銃で魔族を撃ち殺していく。

二人は退魔士のタッグの中では最悪だった。

エリアは集団性に向かないし、シユウは指揮能力は低かった。

だが、個人能力は二人とも高い。

走り出したエリアはもう森の主の前にテラス・セイバーを構えて威嚇していた。

「オオ、オオ、ソナタガ旋風ノ退魔士カ、噂二聞イタ通りノ強キ女子ダ」

「一つお聞きしますが。真つ二つにされると、退魔の光に当てられるの、どちらがお好みでしょうか？」

「ナカナカノ胆ダ、今夜ホド嬉シキ夜ハ、ソウソウ来ナイダロウ」

エリアは気づかれないように魔法を詠唱する。

1対1なら大声で叫び、斬りかかってコイツを地獄の落しただろ
うが。

今回は敵勢力は不明だ。ただ暴れるだけでは生き残ることは出来ない。

「女子ヨ、イイ事ヲ教エテヤル。2週間以内ニ、最凶ノ魔王ガ復活スルゾ、フハハハハ！！」

エリアの瞳に怒りと復讐心が巻き上がる。

魔王を話しに出されて何もしない彼女ではない。

「気が変わりました、この森を滅ぼします」

そう言って、地面に剣を突き刺す。

「何ヲ、スルカト思エバ巨大儀式ノ魔法ノ発動力……ソナ魔法ガ効クト思ウノカ!!」

魔族はエリアをバカにして高笑いをしている。

しかし、彼女は気にせず何かを口ずさんでいる、言葉と言葉を紡いで。

「いい事を教えましょう、私は儀式魔法などという物には頼る気などありません」

テラス・セイバーを中心にして眩くて白い魔法円が浮き上がる。

魔族はこの時、僅かにだを感じた。これは魔法ではない、と。

「これは太陽の力を借りて造った物です、魔法ではなく能力と言った方が近いでしょうね」

そう言っている間にも着々と魔法円は完成していく。

「マサカ!? ソノ剣ハ、三大聖剣 テラス・セイバーカ!!」

魔族が気づいた時には遅く、もう完成していた。

「直径3キロを攻撃範囲としました、闇の住人は全て消し飛びます」

「マテ!!! ヤメロ!!!」

エリアはただポツリと一言だけ言った。

「……死んでください……」

それが引き金でテラス・セイバーの力が解放された。

魔法円が白で埋め尽くされていき、昼かと思うほど明るく照らす。

そこに天から白い光が舞い降りて魔族を一掃した。

「まだ生きていたのですか? B級はやはりタフですね」

エリアは剣を抜いて森の主に引導を渡した。

魔族は塵となって消えていった。

魂は魔族や人、動物に関係なく天に連れて行かれる。

この魔族も来世では人になるのか? また魔族として生まれるのか? それは分からない。

シュウがエリアの元にやっと辿り着いた。

「エリア、大丈夫か? 怪我なんかしていないか?」

いつになく優しい言葉をかけてきた。

シユウは分かっていた、先ほどの技を使ったときエリアは怒っていることを。

「別に気を使わなくてもいい、私は大丈夫」

「そう？　ならいいけど」

「ねえシユウ明日予定空いてる？」

退魔士は教会からの指示で世界中を飛び回る。

明日からエリアは一週間休暇だ。

「一応空いてるけど、それがどうした？」

「明日、私と付き合って」

シユウの耳にその声が届くのに何年掛かっただろうか？

「聞いている、シユウ？」

唐突なエリアの発言に顔を真っ赤にするシユウ。

「え、え、エリア！　も、もお、もう一度復唱してくれ……！」

エリアは呆れ顔で言った。

「だから付き合って」

顔を紅に染めたシユウはぎこちなく動き、鼻からは血が出ている。

何を想像したのだろうか？

「そ、それってデート!？」

「ちょっと買い物するから、荷物持って欲しいだけ」

シユウは右手で軽くガッツポーズをとっていた。

ここで二人は気づいていなかった、ある魔族の一体に……。

「戦闘能力から推測して、差し詰め我らの目的には障害は発生しませんね」

黒い少女はエリアとシユウを見ている。

他人の恋路ほど彼女にとって面白いものは無い、だがそんな事の為に監視しているわけではない。

退魔士が近くにいた事が厄介なだけだ、世界を手に入れるために。だが、それを可能にする人がこの近くで眠っている。いや主を甦らさせることが出来れば、退魔士など蟻同然。だがやはり拙い物でも危険性が1%でもあるなら警戒は必要だ。それが主の教えであり、魔王の強さである。

「魔王様、リンは魔王様の眠りを覚まさせて上げます」
リンは初恋の気分で二人の後を追っていた。

忍び寄る影02

忍び寄る影02

ユーグライト帝国のハイラという街の宿屋で泊まっていた。

この国は帝国主義で最近では近隣諸国を攻めては取り込んで徐々に巨大化している。

通常他国の者は入れないのだが、退魔士は別だ。

街に魔族が入られるのは困るからだそうだ。

聖剣を研ぎながら昨日買ったお菓子を食べている。

「なんでシユウはあの時、紅くなっただろう……」

そんな事を考えながら朝日を確認する。

いつもならテラス・セイバーを窓から吊るし日光浴させるのだが宿屋の小母さんに注意された。

今日はいつもの修道服で隣の部屋で寝ているシユウを起こしに行った。

ドアを何度ノックしても返事が無く、聴こえるのは大きな歯軋りといびきだけだ。

寝ていると分かったからエリアは迷わず部屋に入った。

彼はパンツ一丁で寝ていた、何故か布団が床に落ちていて枕に抱きついていた。

退魔士がここまでだらしなくてどうすると思ってしまう。

優秀な退魔士ほどキツチリとしている筈なのだが……。

とりあえずエリアは彼を起こすことを先にした。

「起きて」

しかし声が小さすぎてまるで聴こえていない。

今日はいつもの買い物とは違う、ここハイラでは色んなものが揃う。

流行のファッションやら珍しい物やら闇市まであり、奴隷の売買

まで普通にされている。

沢山手に入りたい物があるのに……一人では持ちきれぬわけがない。

エリアは全力で彼を起こす事にした。

「我、風をまとい世界を旅するものである、汝、世界の理を超えて、舞えー！」

この魔法は詠唱してから完成に時間が掛かるが、A級の魔物にも効く風魔法だ。

魔道書から調べて自分なりに作った魔法だが、威力は最高だ。

部屋の中で白い風が渦巻き始めた。

屋根は今にも飛びそうになっている。

寒いと感じたのか徐に目を見開いたシュウは絶叫した。

「エリア！ お前何やってんだ！！」

「シュウを起こそうと魔法を使おうとしていた」

「俺を起こすのに規模だけは考える！！」

エリアはついつい首を傾げてしまう。シュウを起こすのに調度良い強さだと思っていたのに。

彼は瞬く間に服を着た。

「あのさ、エリア……部屋から出てくんね？」

「なんで？」

「いや恥ずかしいから……」

「なんで恥ずかしいの？」

少しづつシュウの顔が真っ赤に染まっていく。

彼女は彼の反応を見て微笑んでいた。

「とりあえず服着るまで出ててくれー！！」

エリアは部屋から追い出されてしまった。

どこがいけなかったのだろうか？

突然の出来事に状況を把握できていない猫のように彼女は部屋の前で座り込んでいた。

しばらくして、シュウが出てきた。

「エリア何で部屋に突入してきたんだ？」

「約束」

シユウはどうやら忘れていたみたいだ。

徐々に思い出してきたみたいで、また顔が真っ赤になった。

クスリとエリアは微笑んだ。

家族のいない彼女にとつては楽しい時間の始まりである。

彼女はシユウの手を掴んで走り出した。

宿屋の玄関を越えて人込みの中を並縫いながら目的の場所へと向かう。

「エリアどこまで行く気なんだ？」

「いつものお店」

「俺、お前のよく行くところなんて知らねえぞ」

大通りから少し外れたところに、その店があった。

看板に大きな剣が吊るされてある。

女の子が普通来るところでは無いお店だ。

エリアは無言で扉を開けた。

店内は古臭そうだが一応、一流の鍛冶師の店だ。

店員の人がエリアに気づいた。

「いらつしゃい……ってエリア嬢ちゃんじゃねえか」

「お久しぶりですロードさん」

「また大きくなったなあ、この前まではこん位だったのによ」

ロードはエリアがまだ7歳頃の事を言っていた。

「もう15歳かー、隣にいるのは彼氏さんか？」

シユウの顔がゆでられたタコのようになった。

「か、か、彼氏い!？」

「シユウはただの相棒です」

エリアの一言にシユウはしぼんでいった。一体どうしたのだろう？

げらげらとロードはシユウの姿を見て大笑いしてた。

「シユウ君か？ お前頑張れよ！」

何度もロードはシユウの背中を叩いた。

「それよりロードさん、注文した物は出来ていますか？」

「おうよ！ ちゃんとして出来てるぜ、ちょっと待っててくれ」

彼は店の奥に入って、純白の剣を持ってきた。

「テラス・セイバーの改良版だ、チャージしても5時間までなら太陽の力は減らないし、太陽の力がゼロになっても退魔の剣としての効力はあるからな、それと……」

ロードはもう一本、大きな剣を出してきた。

「こいつは聖剣 エルグランド、かつて伝説の魔王と互角の力を持つた世界の守護者が使ってた剣のレプリカなんだが……お嬢、使ってみるか？」

「魔王を殺せるなら問題ない」

そう言っただけで彼女は片手で剣を持ち上げた。

シユウはいつも思う、あんな綺麗な腕からどうやって持ち上げているのだろうと。

「重量は最適、魔力を吸って切れ味が増すのね、テラス・セイバーと同じ力があるの!？」

彼女は簡単に剣の力を見切った。

「しかしな、お嬢。三大聖剣最強のエルグランドは一本しかねえし、レプリカでは本物に劣るし、なによりコイツはすぐ折れる」

二人は首を傾げてしまった、ロードは頭をぼさぼさ掻きながら説明した。

「本物の使ってる金属が未だにわからん、魔法で強化した鉄を使ってるのか？ 特殊な金属を使ってるのか？ または魔法に相性のよい物を使っているのか？ さっぱりな」

「今のところ本物は作れない、と」

「まあ、そういう訳だ。あ！ あともう一つ注文品があったな
彼は二本の短剣を取り出した。

「ほらよ、降魔の短剣だ。大きな剣を使う嬢ちゃんに扱えるんか？」

「魔王は最低でも魔界全土を敵に回しても生き残れる力がある」

エリアの声は少し震えていた、怯えるような感じで。

「殺す為には退魔士を極めるだけじゃ、倒せない……」
本当に悲しそうな声だった。

不意にエリアは肩を掴まれた。

シユウが彼女に聴こえるほどの小さな声で強い決意を囁いた。

「一人で戦おうとするな、エリアには相棒の俺がいる。少しは俺にも頼ってくれよ」

エリアの心に微量だが嬉しかった、本当に嬉しかった。

『エンもこれぐらい強ければ良いのですのに』

突如、女性の声がエリアの頭の中で響いた。

エリアとまるで、いやまったく同じ声が。

店内を見渡すが店の中には女性などいない。

「どうしたんだ嬢ちゃん？」

「なんでもない」

今は気にしないでおく、幻聴もありえなくは無い。

「それと嬢ちゃんとシユウに教会から怪しげな指令書が来てるぞ、緊急の事なんだとさ」

エリアに手渡された指令書の内容はこうだった。

『先日、A級の魔族3体がラールド国のリア村に確認された、退魔士の中で一番現地に近いエリア・オーシャンとシユウ・トライドは直ちに魔族の詳細なデータ収集し増援が来るまでの魔族の監視にあたれ、可能であれば討伐せよ』

何やら物々しい内容だ。

エリアはA級とは3回しか手合わせしたことが無い。

一応苦戦するかもしれないが、勝つことは可能だろうか……何故、最後に可能であれば討伐せよ書く必要があるのだろうか？

「嬢ちゃん。長年、退魔士を見てきた俺から言わせればこの指令はキャンセルした方が良いと思う。前にいた常連の退魔士もこういう指令を受けてからは姿を現さなくなった奴も多い」

ロードは真剣な顔でエリアに警告するが、エリアはまるで聞いていなかった。

「大丈夫、シユウ行くわよ」

闘牛よりも速い速度で彼女は宿に戻って行った。

「ロードさんさようなら。エリア！ 待ってくれ！！」

シユウはエリアの剣を持って追っかけて行った。

そして、二人とも指令書を忘れて行ってしまった。

「大丈夫か？ たく、指令書の詳細なデータを忘れて行きやがって」

ロードはデータをゆっくりと見ていく。

彼は妙な悪寒がしていた。

こういう指令を出す時の教会は何か隠している。

しかもA級が倒せるようになったばかりのひよっこ退魔士を使つて偵察させるのだから。

「大体、魔族の発見時刻ぐらい的確に書けよ。これじゃあ、レベルを隠しているようにしか見えねえじゃねえか」

まったく教会のやることは意味分からん。

たしか伝説の魔王と世界の守護者の神話もリア村から伝わったんだっけな。

魔族たちは何かしようとしている、ロードは不安を感じながらも剣を作っていた。

忍び寄る影03

忍び寄る影03

エリアとシユウは村に着いた時に村の異変に気づいた。誰も人の気配を感じない。

「エリア感じるか？」

「誰もいない」

人どころか小鳥の声や風の音も聴こえない。

まだ真昼間なのに。

「俺は西の方を見てくる、エリアはここいらを頼んだ」

「わかった」

エリアの了解を確認したシユウは急いで走り出した。

彼も感じるのだろう妙な静けさに……。

今日はテラス・セイバーだけでは不安があった、だから持っていた剣は全て持ってきた。

右腰にエルグランドを、左腰にテラス・セイバー、背中に改良版を背負っている。

短剣は懐に隠しておけば、大丈夫だろう。

リア村、退魔士と魔族の戦争を今でも伝えている村だ。

昔、ある魔王が世界を手に入れようとした。

あたり前のように退魔士が戦い、負けて。勇者が現れて、魔王を倒し世界を平和にすると誰もが思っていた。

だが勇者は負けてしまう。

それを知った聖王と呼ばれた世界の守護者が魔王と戦う事を決意する。

魔王と聖王の戦いは壮絶で大陸のほとんどを火の海にしてしまった。

持久戦となり戦いに戦った聖王は相打ちを覚悟して魔王に一撃を

決めた。

そこに神が舞い降りて弱った魔王をリア村にある神殿の奥深くに封印した。

聖王は傷ついた体を癒すためにとある島国に身を隠して今も眠り続けている。

ちなみにエリアの仇は別の魔王、現魔王のガイル・ドヴァンデイという魔王だそうだ。

実際に彼女が調べたわけではない、熟練の退魔士の人から聞いただけだ。

「ガイル・ドヴァンデイ……」

風の国を滅ぼした、魔王。

また噴火するようにエリアの復讐心に火が点いた。

自分でも分からないが名前を聞いただけで無性に腹が立って、拷問でもして永遠の地獄を味合わせてやろうと思っている。

「あまりその名前を口に出さないほうが良いですよ」

振り返ると凜々しいメイドが一人エリアを見てクスクス笑っている。

彼女をメイドと言うのに少し抵抗があった。

背丈ぐらいあるドクロの杖を持って、黒髪に時折殺気を剥き出し、決め手に死の匂いを漂わす黒い水晶のネックレスをしている。

それに少しエリアと似ている感覚がある、心が。

だが間違えていけない、見ただけで分かった。魔族だ、しかも、A級だ。

「退魔士の私に何用ですか？」

彼女は妖艶に微笑みながら言った。

「あ・な・た、を殺しに来ました」

ゆっくりな口調だが禍々しい殺気に押しつぶされそうになる。

本当にA級なのか？ 今まで戦ってきたA級と比べ物にならないほど重圧がエリアにかかる。

「貴様の目的は何だ？」

「私は貴様じゃなくて、リン・レバンスと申し」
彼女が言い終えるまえにエリアはテラス・セイバーで彼女を斬った。

白い華奢な二つの手が後ろからエリアの首を包むように絡めてきた。

「その速度で不意打ちのつもりですか？ 遅すぎますよー」

瞬時にエルグランドを抜いて半円を描きながら斬った。

しかし斬ったのは彼女ではなく、空気だった。

「残念です、リトライしますか？」

何度も剣を抜け目無く斬りかかるが、全てかわされてしまう。

リンはかわしている時にわざと可愛らしく欠伸したり、優雅に踊り美しくかわしていく。

「何時になったら当たるのかなぁー？」

完全に舐められていた。

エリアは一回、間を取り直し剣を持ち直す。

リンは幼い子供が自分だけの物を見せ付けるようにエリアにある物を見せた。

「はい問題です。これなーんだ」

それは降魔の短剣だった、ロードに作ってもらい先ほどまで懐に入れていた短剣。

懐の短剣が一本無い。

「何時の間に盗んだのですか？」

「ついさつき、貴女が無闇に剣を振り回していた時ですよ」

突然、発砲音が響き何発もの銃弾が飛んでくる。

シューが来たのだ。

「お前が魔族か、太陽の出てるうちに暴れる事ができるなんてな」

「……結構良い顔立ちの少年……ですけど魔王様には劣りますね」

エリアは人に見せられないほどの残酷な瞳で彼女に斬りかかった。リンはすぐに意識をエリアに戻して素早くかわす。

「危ないところでした、退魔士はそこまで不意打ちを好むのですか？」

シウとリンは気づいていなかった、エリアの顔が少しずつ狂った笑みに変わっていつてる事に。

「……フフ……」

不気味に微笑みながらエリアは剣を振り回す。

「……フフフ……敵……全部、敵……楽しい……」

エリアの動きがだんだん速くなっていく、剣を振る速度も足の動きも、そして何より心の歪む速度も。

テラス・セイバーがエリアの何かを感じ取り、柄から黒く変色していく。

黒く、夜の闇より漆黒で、絶望の闇より暗い色になってゆく。

エリアは心が歪み、聖剣が黒く染まり、復讐心に囚われた剣でリンの杖を斬った。

「どうやってそこまで速くなっているのですか！？ くっ」
リンがもう限界の速度まで上げているのにエリアはついて来れている。

人間に出来る業じゃない、リンは人間が友情や愛で強くなることは知っている。

だがエリアから感じるのは単なる暴力の感情、復讐心や怒りが大きく目立つ。

そこでリンは感じた……エリアは楽しんでいる。

戦うことに、殺すことに、歪んでいくのに悦んでいる、その姿はまるでとしか言いようがない。

本能に従って生きるD級の魔族のようであった。

これ以上エリアに速くなられては困るが、原因が分からない。

そこでエルグランドが目に入る。

黒く染まっても形は分かる、がもう一本の剣と何かが違っていた。テラス・セイバーは柄から黒くなっているのにも関わらず、エルグランドは刃先から変わっていつてる。

リンはここで魔法を使った。

「我が影に潜む一族よ、汝、その姿を現せ！！ ファントム」

リンの影から長く黒い腕が出てエリアの足を鷲掴みにした。

エリアはそのままこけて思いつきり顔を打った。

瞬時にリンはエルグランドを奪い取り破壊した。

忍び寄る影04

忍び寄る影04

エリアが目を覚ますと相棒の顔が目に入った。

「シユウ……私は……」

「大丈夫だ、お前はエルグランドの闇にのまれていたんだ」

シユウの指差した方向を確認すると、白い剣の残骸があった。

「ロードさんに今度言っておかないとな、あの剣は未完成のなかの未完成って」

元気に優しく言ってくれているが彼も見たはずだ、エリアの酷いあの姿を。

ぼんやりだが覚えている。

シユウにだけは見られなくなった、あんな姿は。

「……見たの……シユウ……」

「何を？」

彼の額に汗が流れている。

「あの姿」

シユウは大きくため息をして、はっきりとエリアに告げた。

「見た、滅茶苦茶強くて悲しい汚れたあの姿だろ」

彼にあんな顔、あんな心、あんな自分は見られなくなかった。

絶対に嫌われる。

絶対に見捨てられる。

そして、また一人ぼっちになる。

エリアの瞳から雫がこぼれだす。

「泣くなよ、俺が泣かせたみたいじゃないか」

それでも明るく振舞う彼が凄かった。

「エリアはさあ、俺がお前の姿を見て嫌いになるとでも思ってたんだ」

ゆっくりエリアは頷いた。

「何年パートナーやってると思ってんだ、そんな事でお前から逃げると思つてんじゃねえよ」

「……でも……でも……」

それでも涙を流すエリアにシユウは思いつきり今までの不満をぶちまけた。

「もうどうでもいいだろ！！ 俺はお前が大丈夫だったらOKだ！！ 大体、エリアは無茶すぎなんだよ！！ 俺の言うことは聞いてくれないし！！ 無計画に突っ込んで、心配させて、無傷で帰ってくる。心臓に悪いわ！！ それに魔王を倒すために時間を費やし過ぎ！！ 最近それで隈が出来ているんだよ！！ それに」
「
エリアは彼の勢いに目を白黒させていた。
激しい彼の口から流れる愚痴の数々に呆然としていた。

「もう、無垢な女の子でいてくれ！！」

彼は言い切ると疲れきつて、息切れしている。
本当に心配してくれていたんだ……。

『退魔士の私はいい人に恵まれていたみたいね……』

「まただ、エリアと同じ声色の少女の声。」

「一体誰なんだ？」

「それにエリア、俺はお前の事が……す……す……す……」

シユウは何かを言いたそうにしているが、あと一歩で言えない。
彼は突如立ち上がり大声で嘆いた。

「やっぱまだ言う勇気がねえよ！！！！」

彼が何を言おうとしかエリアには分からない、だけど。
何だか嬉しかった。

リンは神殿に向かっていた。

危険性1%と考えていた自分が本当に甘かった。

それしか言えない。

「こんなところで魔法を使う破目になつてしまふなんて……」
主の封印は強力な結界で塞がれているし、その過程でも色んな罠が仕掛けられている。

しかし本当に計算外だったのは聖剣が闇に堕ちた事だ。
聖剣を闇に堕して操る事の出来る魔族など魔王クラスのものしかない。
ない。

だが、現魔王のガイルがそんな事の為に時間を費やすはずが無い。
なら誰がそんな事をした？

「……まさか……主が？ いや、あの方に限って人間を助ける事などする筈がない」

主は神を降臨させる為にわざわざ目立つ行動をとつたのだ。
それに姫を殺した一族などを助ける義理も欠片も無い。
神殿の入り口が見えてきた。

リンはすぐに突入しようとしたが、見えない壁に触れたかと思うと電撃が飛び散って左手に火傷を負った。

「かなり嚴重な仕掛けですね、村のものを殺すだけでは全ての罠を解除出来ませんか」

すぐに結界の解除作業に移る。

彼女の忠義の心は誰よりも深かった。

魔王の幼い頃からずっと見守ってきた、強さも弱さも体も心も全部知っている。

リンは元々人間であった。

ある一人の子共救うためにある魔族に記憶も人間の体も魔力も全て捧げてその子供を助けた。

その後、リンは魔族として生まれ変わった。

闇の契約で魔族に生まれ変わった者は魔界では差別の対象であった。

その中でも主は一人の女性として見てくれた。

今なら前世の自分が他人に全てを投げてまで助けたいと思った気持ちも分かる。

やはり作戦の成功確立を上げる為に黒騎士殿も一緒に来てもらえば良かったなあと今更後悔するリンであった。

忍び寄る影 05

忍び寄る影 05

日はだいぶ落ちてきて、もうすぐ夜がやってくる。

「状況報告お願いします」

シユウは真剣な顔で語り始めた。

「現在確認している魔族は一体、能力は不明だが現代使われていない影の魔法と呼ばれる魔法を使っている。日の出ているうちにA級の実力を持つていたためS級と判断、こちらの戦力は二人と聖剣が二本に短剣が二本と俺の拳銃が二丁だけ」

補足するようにエリアは言った。

「魔族の名前はリン、恐らく闇の契約で堕ちた人間と思われる、それに残りの2体もこの付近に潜伏している可能性がある……ある意味最悪の状況ね……」

今日のシユウは一味違う。

何としてもエリアを守りこのミッションを何事も無く終わらせる為に。

そんなシユウの顔にちょっとエリアは惹かれている。

だが、もうすでに彼らの運命は大きく揺れ動いていた。

運命はちよつとやそつとの事では動かない、過去を何度書き換えても大きく動かさせなければ。

それをデイスト・アウターは存在するだけで変えてしまえる。

死ぬ運命の者が生き残ったり、幸せな運命を辿る者が不幸のどん底に落されたり、世界を幸せにも不幸にも変えられる。

それだけ大きいのだデイスト・アウターの力は。

もう目の前まで彼らの運命を変える者が近づいていた。

「そこのお二人、我輩に神殿までの道を教えてくれないか？」

二人はギョツとした、まさか人がいるなんて。

話しかけてきた人は黒い鎧を身にまとって黒く大きな剣を地面に突き刺している。

顔は兜に隠れて分からない。

エリアはテラス・セイバーを引き抜く衝動を必死に抑えた。

コイツは何かがおかしい、そう思うのだ。

テラス・セイバーは魔族が強い魔族が近くにいと極度に反応する。

聖剣からの警告がエリアの左手の神経を通過して脳に来るのだ。

何度も頭の中にSの文字が浮かんでくるのだ、コイツは相当ヤバ

イ……。

シユウは黒い騎士に向かって言った。

「アンタ魔族だろ、しかもかなりの手練だ」

「ほほう、少年はなかなか面白いことを言う、我輩がもしそうなら少年は死んだるかもしれないぞ」

「誤魔化すなよ、アンタが嘘ついてることはこの銃が語ってるんだよ」

そう言って騎士に白銀の銃を突きつける。

「それは我輩への宣戦布告と考えて良いのだな？」

「どう考えても良いけど……アンタが魔族って事に変わりねえんだろ」

黒い騎士は大きく笑い出す。

「そこまで面白かったのか……久しぶりに腕のある奴に逢えた笑いなのか……」

「その通りだ、我輩は魔王 エン・アルザック様に仕えし騎士の者だ！」

黒い騎士はそれを誇りであるかのように強く言った。

「エリアは神殿に向かってくれ、伝説が本当なら早く行かないといけないだろ。俺はコイツを倒す」

小さく頷いて風の魔法を使い神殿までエリアは跳んで行った。

「二人で戦わなくて良かったのか？ 少年よ」
シユウはもう一つの拳銃を取り出す。

「これは俺とアンタの戦いだ、それに彼女は魔王が一番嫌いなんでねそっちの方が集中できると思ったただけだ」

「最近の退魔士は弱体化している噂は嘘のようだな、我輩が手合わせした退魔士の中で少年は一番若い、一番強いと確認した」

「そりやどうも、さっさと終わらせやるよ。俺の弾丸でな」

その夜、リア村は激しい銃の発砲音と雷の音が轟いた。

エリアの視界に神殿が入った。

聖剣を抜いて、太陽の力を少し使う。

テラス・セイバーはとても便利だ、洞窟のなかでは松明の代わりとして代用できる。

神殿の中は最初は祭壇があり、神の像の下に反逆の間と呼ばれる場所へ行く入り口がある。

像はもう既に壊されていて顔の部分だけが無くして無残に佇んでいる。

入り口の前に神々の壁画が見えた、一人の神だけを除いて全て破壊されている。

女神 セアラ、この大陸を造った神であり神々の母なる神。

エリアは反逆の間への道へ足を踏み入れた。

彼女は大きく目を見開いた。

反逆の間は多くの迷路と罠が多く仕掛けられていると退魔士の学校で習ったから。

なのに、あたり一面……地下の大きな空間にしか見えない。

「まさか……全部壊したって言うの」

エリアは走り出した、時間が無いかもしれないと思いつながら。真っ直ぐ、真っ直ぐ、放たれた弾丸のように真っ直ぐに。

かなり深いところに辿り着いたところで地面が大きく揺れた。

そして大きな女の声が耳に轟いた。

「紅蓮に燃える炎と深淵に潜む影を絡めて漆黒に燃えよ!!」

エリアが音の聞こえた場所に行くと言の中、リンは優美に歩いていった。

「我、風をまとい世界を旅するものである、汝、世界の理を超えて、舞え!!」

大きな白い風が激しく渦巻き白き竜の如く暴れまわる。

リンはエリアに気づいて魔法を使う。

「風の竜よ、闇と光の盟約に則り、我が前に現れん!!」

黒い風が舞って渦巻き始めた、嵐のように勢力を強くして黒き風の竜のように現れた。

「舞え!!」

「行け!!」

二人の音が同時に響き、黒と白の風の竜は激しくぶつかり合う。

竜と竜がお互いを食い合うように風はぶつかる。

リンはまた何か詠唱している、それにエリアは気づいていなかった。

「我が影に潜む一族よ、汝、その姿を現せ!! ファントム」

リンの影から、いや辺りの影から黒い人型の化け物が這い出る。

エリアは聖剣を引き抜き化け物たちを斬っていく。

早く、速く、高速に、斬ることに集中しながら……光が闇に墮ちる感覚を感じながら。

さっきのように闇にのまれてはならない、闇も利用するように。

テラス・セイバーがエリアの復讐心を感じ取り黒く染まってゆく。

魔王を倒せるなら、魔族にでも人外にでもなっけてやる。

「本当に良いのですか?」

また少女の声が響いた。

私は魔王を倒せるなら、どれだけ強くなってやる、この身を闇に墮としても。

『魔族とは完全なる罪なる者達なのではないのです、天使が光を持って生まれた均衡を保つために生まれた闇の者達なのです』

だが、人を殺す。

そして一番の親玉はお母さんとお父さんを殺した。

『それは死の均衡を保つ為、出会いと別れがあるように、死があればまた生まれる』

死んだらもう逢えない。

声の主は優しく言った。

『いえ逢えますよ、彼は一途ですから私に逢う為にはどんな事でもしますから』

それはシユウの事？

『シユウ殿はそこまで執念深くありません、それに私は彼としか言っておりませぬ』

なら誰？

声の主は優しくゆっくりとお姫様の口調でさらりと告げた。

『私の愛しい魔を統べし王ですわ』

テラス・セイバーが怒りに染まった。

アンタ何者、そしてどこから私に言っている。

犬歯を剥き出してエリアは殺気を流れ出している。

『自分に問う気なのですか？ 私は貴女ですよ、退魔士の私』

名前は？ 魔王との関係は？

『名前はもう既に食べられてしまいました、彼との関係は婚約者ですわ』

エリアは太陽の力を完全解放した、全ての闇を取り払うように。

リン・レバンスを殺した後に、お前も殺す。

『切腹でもするおつもりですか？ 私が死ぬ時は貴女が死ぬときですわ』

なら魔族を撲滅した後にお前を殺す。

『貴女には出来るはずがありません』

エリアはムカつくほど腹が立った。

自分には出来ないと言われた事に、激しく。

何故そう思う。

『思うのではありません、配下の方々なら貴女一人で大丈夫ですが

……魔族撲滅は魔王も殺すことですわ』

何が言いたい？

『魔王を殺すことの出来る役者はたった3人、セアラお母様と世界の守護者と……』

少女は一拍置いて純粹で透き通る声で宣言した。

『この私ですわ』

何とも言えぬ怒りがエリアの中で爆発した。

「だった殺してやる、魔王諸共ぶつ殺してやる」

『彼は憎しみだけで殺せる魔王ではありませんことよ、純粹に彼の事を分かつてる者しか倒せません、ですから神々が手を出せなかったのですから』

エリアは心を歪めながらリンに視点を変えた。

もうコイツから聞く事など無い。

だがリンはいなかった、どこを見渡しても黒の化け物ばかりだ。

「逃げられた……」

『何を言っているのですか？ 彼女は魔を統べし王に激しく恋しているのに、ここまで来て逃げるはずがありませんわ』

なら進む場所は地下。

風の魔法を使って出口の場所まで跳んだ。

出口を抜けると大きな広間に出た。

そこにはリンが封印の魔術を解除し終わったばかりの姿があった。
「遅かったですね、退魔士さん」

大きな扉からは鍵など無く、開けたらもう闇しかない箱のようであつた。

変わる運命 01

第2章 変わる運命

リンは封印を解き終わり、心臓の鼓動を聞くように耳を傾けている。

「聞こえますか、主の声が。逢いたい、逢いたい、姫に逢いたいと言っておられます」

純粹に何も恐怖する事無く、魔王の声に耳を傾けて。

エリアは怯えていた。

親を殺した魔王よりも禍々しく、敵を全てを押し潰し、聖なる輝きが消し飛ぶ強さに。

リンは魔王の耳に届く声で叫んだ。

「魔王様、魔王様、聞こえておられますか？ リンです、リン・レバンスです！」

彼女は魔王の声を聴いて嬉しそうな声で言った。

「仰せのままに」

リンは重い扉を開けた。

扉が重々しく開いていくたびに、濁流のように絶望と殺気の波がエリアを襲った。

激しく、恐ろしく、禍々しく、邪悪で、悲しい、強さに。

極度に震えきった手で、頭を抱えながらエリアは座り込んでしまった。

どんな敵でも背中だけは見せなかった彼女が、臆してしまった。

『どうしたのですか？ 魔王ですよ、倒さないのですか？』

彼女の生存本能が激しく荒々しく訴えている。

逃げろ、と。

だが胸に深く突き刺さった重圧から逃れられない。

扉が完全に開くと出て来るのは闇ばかり、悲しみと恐怖をエリア

を覆い絶望に墮とされる。

「……いや……」

彼女は無意識に言った。

「……い、いや……死にたくない……」

目からは涙が止まらない。

足は震えきつて歩けない。

腰は臆しすぎて力が入らない。

手は極寒の中にいるみたいに寒気しかない。

本当に、本当に、私が殺せる相手じゃない……。

『だから言いましたのに、貴女では彼を倒せない。彼を知るもの
しか倒せない』

声の主は闇の濁流の中でも落ち着いていた、それはリンもだった。
この闇の中で二人は魔王が出てくるのを心から待っている。

『鎖が何度も引き千切られる音が何度も聴こえた。』

『もう魔を統べし王はそこまで来ていますよ』

エリアは絶体絶命の子猫のように怯えていた。

鎖が引き摺られる音がゆっくりと近づいてきた、死神が迫るよう
に。

次第に真紅の二つの点が見え始めた。

眼だ、闇の中でも見える真紅の瞳に、手枷を着けたままこちらに
来る黒い人物が。

「リンお姉ちゃん？」

幼い少年の声が入リアの耳に届いた。

一瞬思考が停止しそうになるくらい純粹で優しい声に。

「リンおねえちゃんああああああん……」

真紅の瞳が消えたと思うと、目にも留まらぬ速さで瞳の持ち主は
リンに抱きついた。

それは身長100?にも満たない少年だった。

リンは妙な気分で主がエリアの心を食べる光景を見ていた。エリアは何も口にしていないのに主は誰かと会話をしていた。それに退魔士の事を姫と呼んでいた……。

「あの魔王様」

「何、リンお姉ちゃん？」

「先ほどの退魔士を姫様と呼ばれましたか？」

主はこの上ない無邪気な笑顔で言った。

「うん！ 風の姫の生まれ変わりだよ、ちゃんと匂うんだもん」

主の鼻は嗅いだだけで、どんな魂か？ また善悪まで判断してしまっ。

さすが女神 セアラ様の御息。ただの魔族と一味も二味も違う。あとさつき、リンお姉ちゃんが姫を間違えて倒すところだったんだからね」

「先ほどの聖剣を操ったのはやはり魔王様だったんですか。いえ、申し訳ございません魔王様、姫様と見抜けず」

「リンお姉ちゃんならいいよ」

この方は魔族の長として幼き精神を除けば相応しい方だ。

「何かリンお姉ちゃん、変なこと思ってない？」

主は頬を大きく膨らませて上目遣いでリンを真っ直ぐ見ている。

「いえリンは純粹に魔王様に再び逢えた事に感謝しているのです」

一応、嘘はついてない。

300年離れ離れだったのだから。

それまでの間、きつい差別に耐えながらS級並みの力を蓄えたのだから。

D級からS級まで跳ね上がるのにどれだけ難しかった事か。

突如剣を地面に引き摺って誇り高き騎士殿まで現れた。

「おお、主が目覚めたか。お久しぶりでございます、エン・アルザック様」

「黒騎士のお兄ちゃん!!」

主は自由気ままな子供ように跳びまわる。

「そついえば退魔士のもう一方が見えませんか」

「私が倒した。中々の少年であったぞ、次回戦う時が楽しみだ。同格で再び逢うのか、我輩を超えて現れるのか」

黒騎士殿の悪い癖だ。

純粹に戦いを楽しみ、実力が伸びる者は敵味方問わずわざと生かす。

「あの少年はまだまだ伸びる、いずれS級と呼ばれし我輩達を苦しめるレベルまでな」

「重要危険人物じゃないですか！？ 何で生かすんですか！？」

「いつも通りだ。弱者は強くするだけ、強者は全力で捻り潰す」

こういう時だけは魔族なんだから、と思いながら入り口に視線を向ける。

黒騎士殿も感づいているのか、気づいているのか、時折入り口を確認している。

「主、城にはどのような方法で行かれますか？」

「影のお爺ちゃんに頼んで影の道から行く！！」

調子の良い時の主は自分が楽しいと思う道を気分を選んで進んで行く。

影の道、城に行く為のもっとも危険な道。

主は私の実力が上がっている事にもう既に気づいておられた。

リンは魔王と初めて会った時の事を思い出しながら移動魔法の魔方陣を作っていた。

変わる運命02

変わる運命02

シユウは腕が折れていても魔王達のようにすをずつと見ていた。

黒騎士のレベルは半端じゃない、真つ向から行けば殺される感じだった。

弾丸の数を数えるが撃てる数が殆ど無い。

「……今のところエリアは安全、なのか？」

自分の不甲斐なさに呆れてくる。

黒騎士は自分のような銃などの飛び道具に滅法強かった。

あえてエリアが戦っていたら勝っていたかもしれないが、詰めの甘い判断ミスばかりだ。

黒騎士の鎧は闇の魔法で強化されていた、テラス・セイバーなら斬れた。

S級二体に魔王が一人、しかもエリアは人質ではないが動けない。シユウはリンを確認する。

リンは魔法を使っていた、もし移動の魔法を使うならあいつしかない。

案の定、リンは魔方陣を描き始めた。

「……あれが、魔界に伝わる闇の魔法……」

俺が今まで見てきた魔族の闇魔法とリンの闇魔法ではかなり違っていた。

まず色が違う。

黒に近い色なら何度か見たことはあったが、黒い魔方陣は初めてだった。

しかもリンは魔法発動に必要な詠唱をしていない。

通常、魔法を発動するためには魔力と言霊、詠唱が必要になる。言葉を無視して発動できるなんて……。

なんで俺が魔法の知識を知っているかと言うと、エリアが魔族討伐の時に何度も本の内容を口ずさむから勝手に覚えてしまった。

たしか移動魔法は高等過ぎて使える人が限られると聞いていたけど、あの魔族は使えるみたいだな。

「主、その方は姫様で合っているのですか？」

「僕の鼻に間違いは無い！」

魔王は胸張って言うが、全然説得力が無かった。

「魔王様、移動用の魔法が完成しました」

「魔界の城へいざ参る！！！」

魔王達が地面に沈み始めた、魔法が発動したんだな。

顔が完全に沈んだところで俺は全力で走り出す。

移動魔法は少しでもずれたタイミングで入ると場所が微妙にずれる。

魔法陣との距離が5mのところまで収縮し始めた。

間に合うか？ 一か八かだ。

俺は魔方阵に決死の勢いでダイブした。

魔方阵を潜ると黒い空間に出た、空間と空間の狭間だ。

俺達の住む世界と魔界を繋ぐ通路。

しかしここも収縮の範囲内だ。

訳も分からず走り出す。

走りながら下を見るが、足場が見えない。

大地を走りぬく感覚が足の裏から伝わるのに、足場が見えない。

もう理由なんて考えてない、パートナーを救うために相棒が魔界

へ行く。

出口らしき場所から眩いほどの光に目が焼けそうになる。

太陽？ そんな訳が無い、魔界に太陽は無いと聞いている。

じゃあ何だこの光は？

不意に少女の声が俺の耳に轟いた。

「退いて下さいいいいいいいいい！！！！」

純白の衣装を身に着けて、天使のような白銀の翼で飛んでくる、

銀髪の少女。

俺が少女の姿を全て認識した時にはもう遅く、横腹にタックルを喰らってしまった。

そして魔王達の場所に近い場所に降り立つはずだったのに。

この天使と似た少女の所為で、ポイントがさらにずれてしまった。少女とはぶつかった時に別の場所に飛ばされたが、まあ同じ世界で会うことになるだろう。

俺はどこかの世界に放り投げられた。

一面の青い空とかなり深そうな樹海に俺達の世界と同じ感じの村。

「……戻ってきてしまったのか……」

すまないエリア、駄目な相棒を許してくれ。

俺はそのまま森の方に落ちていった。

瞬く間にエリアとの思い出が甦る。

死ぬのか、彼女の過去を知ってから彼女の助けになれば良いと思っただけで早10年。

やっと彼女を守ると考えたところなのに。

「結局好きって言えなかった」

エリアは恋関係には少し鈍いから直接言わないと分かっただけで無いし。

もう少しで天国の扉が開く。

まだ死にたくねえよ、死ねねえよ、死にきれねえよ。

魔法の使い方は分かる。

詠唱する言葉も分かる。

基礎知識も多少なりともある。

だけど俺には魔法を発動するための魔力が少ないのだ。

「やっぱエリアみたいに魔法を使えるように訓練すれば良かったな」
このまま落ちれば確実に天国行き決定だ。

なら足掻いてやろうじゃないか、もがき足掻いてやる。

「我、風を支配し嵐を呼ぶものであり、風よ我の声に答えん!!」
突然強い風が吹いた。

俺の声に風が反応してくれた。

「風よ、今秘めたる力を解放し我に力を与えん!!」
風が荒ぶり始める、同時に黒雲が現れる。

エリア俺にも出来るぞ、幸せの呪文のように毎日音読してくれて
ありがとな。

「風よ、嵐を竜巻を全てを吹き飛ばす強さを持って暴れ狂え!!」
風が消えたと思うと、突如白い風が渦巻き何個も竜巻が出来始める。

初めて魔法が使えた。

あまりの喜びに歓喜に浸っていたつかの間、頭に激痛が走った。
体に耐えられない上位魔法を使った反動が返ってきやがった。
本当に脳に傷がいつてるから怖いんだ魔法ってやつは。
そのまま俺は渦に吞まれてどこかに飛ばされた。

エリアが起きると王族の私室らしき部屋のベッドに寝かされてい
た。

久しぶりにここに来た気がする。

感覚はそんな感じだがエリアは初めてこの場に来た。
記憶を辿っていくと新しく記憶が増えていた。

「ここが貴女の部屋なの風の姫」

エリアはあの声の主に問うた。

「正解ですわ、退魔士の私」

ここは魔界にある魔王 エン・アルザックの城。
そして、この部屋は風の姫の部屋。

何故私に貴女の記憶があるの？

今エリアの頭の中には風の姫の記憶が存在する。

魔王と姫の思い出の数々、姫が風の王国の者である事も。

『デイスト・アウターという言葉は御存じですか?』

「神の反逆者、神に抗いし者と神でありながら罪を犯した者の事をさす」

『詳しくはもう一つ、運命を変える能力を持つ者も入りますわ』

だから何が言いたい？ お姫様は前置きが長いのか？

『ごめんなさいね、率直に言いますとエンもデイスト・アウターなのですよ』

エリアは硬直してしまった、もう一度確認したくても出来なかった。

『私は言いましたよね、セアラお母様、と……さてセアラお母様とは誰の事でしょう？』

魔王が神の子とでもいう気？

姫はクスクスと笑いながら言った。

『先に言われてしまいましたわ、一応正解ですよ』

やはり何が言いたい、一応などという言葉を入れて。

風の姫は、まだ分かりませんか？ という呆れた口調で補足した。
『貴女がまだ描いている魔族撲滅など不可能な事などです』

お姫様が殺せるなら、生まれ変わりの私にも可能はずよ。

風の姫は本当に呆れていた。

あの殺気の濁流の中で立つことの出来ぬ者が言う事ではない。

彼の心臓を知らぬ人間が殺すことの出来るものか。

エリアの最大の弱点、敵を知ろうとしない。

今までも敵を知らずにA級と手合わせして生き残っている。

『まあ、頑張ってください。彼は貴女も私の一部と思って愛しますから』

私はお断り、特に魔王とは。

エリアは再びベッドの中に潜り込んだ。

自分の敵ばかりいる城の中で一人孤独に。

変わる運命03

変わる運命03

今日はロードの旧友が来た。

「あーあ、今日は人一倍不幸だわ」

あいつはいつも葉巻を啜えて余裕を気取ってやがる。

「かつての相棒が来たのに嬉しくないのか？ ロード・ファンイル」

あいつはいつも通りの神父の格好にエリア嬢のように聖剣を服に隠して俺の前に立つ。

「俺の運命を変えた奴の言う事かあ？ それにエリア嬢の運命を変えたのもお前が元凶だろ」

「ロードの機嫌が悪い原因はそれか。あの少女の運命は前世の時からもう動いているのだよ」

信じられるか、と一言告げるとロードは剣たちを見つめる。

セオ・ライド・シンペクト、エリアの上司で表向きには教会の神父をやっている。

「で、教会の神父が何用だあ？ また変な事を企んでるんだろ、お嬢の事を知ってるって事はよお」

「物騒な表現は避けてくれ、私はあの場所に戻りたいだけだ」

「表現がどうであれ、お嬢が死ぬ運命になる事に変わりねえんだろ」
「愚問だぞロード。私がどういう存在か、ロードお前が一番知ってるはずだ」

ライドは不気味に頬を綻ばせている。

確かに奴に聞くななんて愚かだ。

デリスト・アウターにこの先の運命を訊いているのだから。

「たく天使もデリスト・アウターなんて者になるんかよ」

「正確には私は堕ちた者だぞ。翼も光輪も天使の力も色も、な」
ライドは墮天使だ。

一応、追放はされていないが、墮ちたのでそうだろう。

「結局人間並みだろ！！ 魔王すら口々に倒せない元天使が！！」

「そう感情的になるな、私は喧嘩する為にここに来た訳では無い」
剣を投げる衝動を堪えて、改めて話を聞き始める。

「あの二人は魔界で生存している、エリア・オーシャンは魔界城に、
シュウ・トライドは影の一族の村で確認された」

二人が生きていた事に胸を撫で下ろした。

「お嬢は連れ去られて。で、何でシュウは一番遠くにある影の一族の村に居るんだあ？」

「差し詰め、空間転移魔法の基礎知識ぐらいは得ていたのだろう。

恐らく通常の移動魔法と勘違いして次元転移魔法を潜ったのは良かったが、どこかに飛ばされた。そんな所だろう」

ライドはいつも専門用語の攻撃をしてくる、今回もロードは目を点にしていた。

「すまん、全然分からん。特に魔法は」

「同じ世界を移動するのと違う世界を移動するのでは、ずれが大きいのだ」

ライドが言ったずれという言葉に耳が反応した。

「ずれ？」

「そうだ。通常、移動魔法が消えるのには時間が掛かる。空間と空間を繋げるのだから。消えかけの時に入った者は数mかずれて移動する」

ここでライドの言いたいことを理解したロードは重ねて言った。

「違う世界を通るのではそのずれが大きいのか」

「そういう事だ」

デリスト・アウターこんな奴らに関わった故にお嬢とシュウの運命は変わったのか。

ロードが知っている限りデリスト・アウターは5人。

世界の守護者と魔王とコイツと命を与える精霊と過去を無くした少女だけだ。

過去を無くした少女はもう亡くなっているが、守護者の力でまた出逢うことになるだろう。

デイスト・アウターの数は不明だし、どの種族に生まれるかも分からん。

だが、運命を変える力を持つデイスト・アウターは大抵ヤバイ能力を持っている。

典型的な例は魔王、生命や存在、持つものを喰らいて魔力を作り出し、魔法と桁外れの力で世界を壊そうとしたのだから。

「で、教会の神父はどうするんだ？ お嬢達を救うために救助隊でも出動させるんか？」

ライドは腹を抱えて大笑いしてやがる、どうやら助ける気は無いようだ。

「魔界に行く命知らずな奴はいないだろう、この私ですら黒騎士と魔王の最強タッグにやられるのに」

生き残ってられるほうが凄いわ。

黒騎士は教会のブラックリストに載るレベルだ、この墮天使でも互角の戦いになるのに。

「それに少女は最低でも生き残るだろう、魔王が風の姫を殺すはずがないだろう」

「全くの同感だ」

「他の神々に蔑まれ、女神セアラが魔族たちに懇願して託された少年。魔王になっても幼き精神で逃げてばかりの頃に初めてセアラと同じ温もりの少女と出逢ったのだから……」

魔王は奪い奪われる運命に立たされた者だもんな、と内心納得しておく。

「だが今のシユウに魔界を生き抜く力は無い、あそこはA級以上の巢窟だぞ」

「蜂も鳥も熊も百獣の王も共存することは不可能ではない、それが最凶の魔王でも……」

運命は激しく動きすぎる。

それが不幸なのか、幸福なのか、それは予知能力者でも予測できない。

シユウ・トライド、お前の運命はどこに向かって動いている？

お嬢と結ばれる運命なのか？ 一人孤独に戦う運命なのか？ 又は別の女と引っ付くのか？

「なあライド、この時代に女神は現れるんか？」

答えの無い質問。

だが、奴は答える、答えが変わる事を知っていても。

「風の姫がいなくなり、世界の守護者が死んだら現れるだろう。恐らく今は、出てこない」

この世界に危機が訪れない限り、女神も守護者も出てこないか。

監視の神 ゴークは守護者のリハビリしてるし、運命の神 カルマは世界が崩壊しないようにカバーしているし、俺はどうすれば良いことか？

「本当にお前らは厄介だよ、デイスト・アウター」

ライドは微かに笑っていた、本当に企んでる顔だぞ。それは。

とある島国のある村。

かつては妖怪の森と恐れられ、付近の住人から避けられた森があった。

天使のような大きい翼を広げてそれは森に入った。

長老からも、付近の者からも、それを見つけた少女からも忠告された。

それは白銀の聖剣を持って入った。

それは魔法を使って敵を倒した。

それは森に輝きを与えた。

それは……一体誰だ？

村の者達はそれが帰らないから心配した。

だがすぐに戻ってきた、森の守護者として。

「魔法は感情によつて強くも弱くもなる、やってみて」
少女は指先に魔力を集中している。

自分にも出来るはずだと信じて、例えば異国の文明だとしても出来るはずだ。

そう思いながら幼き少女は今日も頑張る。

「スタック先生……全然、集まりません……」

「今日覚えたばかりで出来たら天才だよ、今日の事が明日に繋がり、明日の事が明後日に繋がる」

白髪の少年はこの国の言葉を覚えた、2日で習得。

来たばかりの時は本当に心配だった。

まさか過去を無くした少女の生まれ変わりに逢えるなんて……。

白髪の少年のあだ名は多い。

『白の旅人』、『天空の使者』、『神の犬』、『聖王』、ああ『

無色の勇者』と言つのもあった。

そしてこんなのもあった。

世界の守護者。

少年はこの言葉を気に入っていた、守護者という言葉が甘美に聞こえるぐらいに。

勇者なんてものは嫌いだ。

形や言い方は違えど、殺しに違いない。

殴られた復讐にやってるような感じがして、少年は嫌気が指していた。

守るものが人でなくて世界だ、この世界だ、それを冒すものが存在すれば少年は剣を持って肅清するだろう。

かつて魔王を殺そうとしたように。

しかし最近、その覚悟が揺らいできている。

純粹な子共の輝きを見たからなのか？

それとも少女の心の光に当てられたからか？

一人が孤独に感じたのか？

それは分らない、単に飽きたという理由かもしれない。ただと確実に、この島国に来てから変わりつつある。

デイスト・アウターの中でも珍しい運命を固定化する能力を持つ自分の運命が変わっている？

正直、少年には縁遠い言葉だ。

変化という言葉は……。

「さあ今日はここまでにして、ミカンでも食べる？」

「スタック先生、後にします」

少女は必死に頑張っている姿を見ていると少年の心は妙に落ち着いた。

極東にある島に逃れて、魔王が動けないうちにじっくり体を癒そうと思っていたのに。

別空間にしようがアイツの気配は分かる。

少年は誰にも聞かれないように呟いた。

「……ずっとこのままでいったかったのになあ……」

それは叶わない夢だった。

永遠の平和など、光と闇が存在する時点で不可能な事だと知っているはずなのに。

変わる運命04

変わる運命04

今日のエリアは荒れていた。

「出てって、一人にして」

しかしリンは怯まない、風の姫と意識が二つある事ぐらい彼女でもわかる。

コップやフォークを投げられてもこれだけはリンは引けない。

「姫様！！ 毒など入っていません、食べてください！！！」

エリアの目の前にあるのは魔界の料理。

最初は大丈夫だろうと踏んでいたエリアだったが魔族と人間の舌には大きく差があるとは思っていなかった。

見た目も作り方も人間の作る料理と然程変わらない。

変わるのは味付けた。

濃過ぎたり、薄過ぎたり、訳がわからない。

一応、風の姫は美味しく食べていたそうだ。

絶対に食べたくない……。

『好き嫌いとは感心しませんね、エンはどの食事でも出された物は何でも食べましたのよ』

「魂も名前も関係無くでしょ」

エンは心だろうが人肉だろうが存在する物なら関係無く等しく食べってしまう。

エリアは大声で詠唱した。

「我、風をまとい世界を旅するものである、汝、世界の理を超えて、舞え！！！」

大きく風が渦巻いて部屋の物を吹き飛ばす。

リンが動けないうちにエリアは窓を割って脱出した。

風の姫の部屋から魔界の村や町は見えない、代わりに綺麗なヒマ

ワリの花畑が見える。

エリアは真っ直ぐ地面に駆け下りる。

このヒマワリ畑は通常の魔族は入れない、魔王の少年が大規模な結界を張ったからだ。

今、魔族の中で花畑に来れるのはチビツ子大魔王以外は入れない。

しかし政治という理由で魔王は来ないはずだ。

花畑の向こうには青い海が小さく波打っている。

黄色と青の世界にエリアは一人立っていた。

『懐かしい香りですわ』

風の姫は勝手にエリアの体を動かす。

花畑を蝶のように踊る。

魔法で風を操り、風と踊るように花畑を歩く。

1歩、また1歩、エリアが歩きたびにヒマワリが喜んでるように輝き始める。

エリアはテラス・セイバーを地面に深く突き刺した。

「シユウ……」

彼は生きているが、エリアはどこにいるのか知らない。

シユウの事だから必ず追って来ているはずだし、ここに来る頃には更に強くなっていると思う。

風の姫は言っていた。

シユウとエンはどこかが似ていて、どこかが違う。

双子が別々に育てられて違いがでるように。どこかが似ている。

だけどエリアにはその違いは分からない。まずエンの事を知らないのだから。

冷たい風が吹き始める。

テラス・セイバーが激しく振動し始めた。

魔王クラスの反応だ。なら誰？ エンは政務なはず。

花畑の外に人影があった。

その影を風の姫が確認した途端に彼女は左手を強く握り締めた。

誰が来たの。

お姫様は答えなかったがテラス・セイバーを引き抜き鞘に収めてから向かった。

「あらあら、ガイル殿。生きていらしたのですか？」

ガイルと呼ばれた者は目測17歳の少年だった。

「相変わらず私の事が嫌いなのですね、風の姫」

二人は睨みあっている。

「まさか、エン様が戻られるとは思っていませんでしたよ。姫様の生まれ変わりも連れて」

「それで私に何用ですか？ 前みたいに殺しに来たのですか？」

少年は含み笑いをした。不気味に殺気を垂れ流しながら。

「あの方が居られる前では殺さないと決めていたのですが、僕は限界なのですよ」

そう言つてガイルは魔法を発動した。

黒い液体の雨が降り始めてヒマワリが枯れだす。

「人間が魔族のトップに近い立場に立つ事などあつてはならない！」

結界が解け始めてエリアを守っていた壁が消えた。

結界が消えた理由を考える間もなくエリアは走り出した。

正確には風の姫が走り出した。

「あんな傲慢で臆病な種族が魔族の上に立つなら、魔族はもう終わりだ」

ガイルは人間を人一倍嫌っている。同時に風の姫も対象内だ。

「魔族の上に立つことを許されるのは神だけだ！！」

彼は左手をエリアに向けて魔法を解き放つ。

「夜の力を反映し、月光に照らされて漆黒に燃え上がれ！！」

左手から放たれた黒い炎は大地から獲物を狙う蛇のようにエリアを追い詰めて逃げ場を狭めてゆく。

枯れたヒマワリも良く燃えてさらに狭めてゆく。

エリアは急いで海に向かうが間に合わない、このままだと炎に焼き殺されてしまう。

「冷酷な冷たき風よ」

右手に雪、

「命を時を止める力を用いて」

左手に風の力を合わせて、

「熱き炎を止めよ!!」

合体魔法を放った。

風と雪の力が合わさった吹雪が炎の蛇に命中した。

炎の蛇はのた打ち回り、息を引き取るように死んだ、
はずだった。

炎の蛇は塵となり、そこからまた蛇が生まれた。

「そんな……」

同じく魔法を放つが、また生まれてくる。

いつまで出てくるのよ。

使えど使えどエリアの魔力が磨り減るだけだ。

「僕の炎がただの魔法に死ぬわけが無い。もつとマシな魔法を使え
!」

二体目の詠唱をガイルは始めた。

これ以上数が増やされたらエリアは逃げるところか、ここで死んでしまう。

必死に海に向かって走り出すが炎の蛇は容赦せず迫り来る。

食われる!! と目を閉じたが何も起こらなかった。

胴体が食いちぎられる痛みも、炎に焼かれる痛みも。

『聖剣を使う、という選択肢もありましたのよ』

風の姫はテラス・セイバーで蛇の頭部に突き刺していた。

優しく剣を抜くと血を振り払うように剣を振った。

優雅に美しく彼女は剣を構えた。

「退魔士の私、魔王クラスの戦い方を教えて差し上げましょう。見ててください」

「戯言を言うな!! 人間ごときで僕を止められる程、現実はいかに甘く造られていない!!」

ガイルは雄叫びをあげて、炎剣を作り出す。

彼はエリアに目掛けて豪快に剣を掲げて、大きな半円を描きながら剣を地面に叩きつけた。

大地は大きくひび割れて、炎の波が一直線にエリアを襲い掛かる。

どうするのよ、私の魔法でも防ぎきれない。

『簡単な事です。避ければ良い事です』

すぐに魔法を詠唱した風の姫は空高く飛翔した。

エリアがいつも飛ぶ高さより、さらに上空に舞う。

「大海に舞う破壊の風よ、太陽と海の力を借りて、我が前に顕現せよ……」

海が荒々しくなり、空には黒雲が覆い、地上では大きく風が舞う。黒雲より数え切れぬほどの雫が落ち、雷鳴が何度も轟く。

「フィールド完成まで、あと少しですわ」

彼女は嵐を呼ぶ魔法を使ったのだ。

雨を降らせてどうする気よ。

『ガイル殿の火は左手が濡れると使い物なりません。火を封じぬ限り私でも勝ち目はありません』

姫はガイル目掛けて垂直に急降下した。空で舞う鷹が地上の獲物を狩るように。

魔法で加速し、テラス・セイバーを構える。

その姿を見たガイルは嘲笑した。

「また同じ手か。炎を封じて、魔王クラスでも傷つけることの可能な三大聖剣で貫く……僕が二度も同じ手を喰らうか……」

ガイルは右手を出して詠唱した。

二メートルもある黒い盾のような物が何枚も現れて、エリアの軌道に立ちふさがる。

「殺戮の炎と鉄壁の間、エンのいない間に魔王を勤められる実力は保持していたようですが……退魔士の装備品くらいは調べておくことをお勧めしますわ」

エリアと同じ言葉、風の姫は魔法をさらに上乘せして加速する。

盾を貫くが最後の一枚が破けない。

「人間の力などそこまでだ！！　すぐに裏切る、己の弱さを他人に押し付ける、恐怖で弱者を押し付けている、所詮そんな種族だ！！」
風の姫はガイルの言いたい事は何百年も前に知っている、だから彼女は言った。

「ですが、魔族も似たようなところがあるではないですか。戦闘の実力で王を決める事など」

ガイルは間髪容れず叫んだ。

「あれは決闘だ！！　上に行くものには絶対なる強者でなくてはならない。頭の良い天才？　魔法が最強？　無敵の武器を持っている？　魔王は全てにおいて最高でなくてはならない！！」

盾に徐々に僅かなひびが入るが、貫けるとは思えない。

ガイルは炎剣を作り出してエリアに向ける。

「エン様は神の血を引く物であり、僕の上に立つ者として相応しいと考えたから僕は魔王を降りた」

炎は溢れんばかりの悪意を爆発させている。

あの方に勝てる者など魔族にはいない、とガイルは最後に語った。

「人間が魔族の妃になる事など僕が許さない！！」
雄叫びと共に辺りは静かに包まれた。

風の姫は率直に言った。

「言いたい事はそれだけですか？　ガイル殿」

「何だと……」

炎剣がさらに燃える、聖剣が闇に染まる時のように感情に反応している。

「はつきり言って、まだ貴方が私に勝てる訳がありません」

「ふざけるな！！　あの天使共でも僕に勝つ事は不可能なのに、それより弱い人間が勝てるはずが無い！！」

風の姫は悪女のように笑っていた。本当に今までの少女の声と思

えぬ悪意の籠った声で言った。

「そう思えるなら貴方は、私の左手にも及びませんことよ」

ガイルは怒りの形相でエリアに炎を叩き付けた。

炎は彼女を覆い塵にした。

だが、まだ声がする。ガイルの懐で……。

「……き、貴様……」

「貴方のプライドは本当に固いですから、侮りに壊してもらったのですよ」

ガイルの胸にはテラス・セイバーが深く突き刺さっている。

盾を割る事を諦めて、降下でついた威力を弱める為に喋って時間を稼ぎ。

わざとバランスを崩して炎を盾にぶつける。

懐が狙える高さで魔法を使い突き刺す。

どれもお姫様がやるには至難の業だ。

風の姫、貴女本当にお姫様なの？

彼女は微笑んで言った。

『そうですよ』

剣を引き抜き風の姫は鞘に収めた。

「これで実力は認めてくれますか？ ガイル殿」

彼は血が溢れないように左手で抑えながら立ち上がった。

「……一応は認めておく、だが僕は貴様を殺すぞ……いつか絶対にな……」

ガイルは城に戻っていった。

エリアは退魔士として自分の弱さを噛み締めながら、ガイルの背中を見ていた。

「魔族はどれだけ強いんだよ……」

変わる運命05

変わる運命05

重い足取りで自分で荒らした部屋に戻ったエリアはベッドに倒れこむ。

風の姫が妙な筋肉の使い方をしたから脹脛が張っていた。

『今の貴女にはエンの右腕　ガイル殿ですら倒すことは出来ない。

無論、私にもすわよ』

何故か上機嫌に言う、風の姫。彼女は強い、お姫様という称号を持ちながらも。

何でエンを好きかわけ。

『覚えておりませぬ……彼に捧げてしまいましたから』

彼女が言いたい事が分かるとエリアは布団の中に潜り込む。

魔王を嫌うエリアにとってこの姫様の行動は理解不能だ。

魔界にも太陽はあった。ただし、エンが作ったものだ。

魔界の太陽は少し青みを帯びていて四角に近い、だから彼は言うていた。

いつか魔族の皆が安心してお母さんの作った太陽を見られるようにしたいと。

魔族の数と人間の数なら人間の方が多そうだ。この知識は風の姫から知った。

彼女はこんな情報を教えて良いのか？ と訊いたら、エンが魔王として立つ限り魔族が負けるわけがありませんときっぱりと宣言された。

風の姫の瞳にかつてのエンは不死身に見えた。

数多くの死体が転がる大地に真紅の瞳で同じ血を引き継ぐ神達と戦った。

1人対複数の戦闘を何年も続けたそうだ。

エンはどうして、貴女の事が好きなの……？

風の姫は少し考えて答えてくれた。

『ひとつの事しか考えられなくなるから……そんなところでしょうか？』

ひとつの事しか考えられなくなる？

姫の言葉は格別に意味不明であった。

『エンは一つの言葉を聴いて20手も30手も先の事を考えてしまいますから、私が幼き頃に城の生活が意で城から抜け出した事がありませんでした。その時に敵国の兵士に見つかってしまい拉致されかけました、そこでエンにたすけてもらったのです』

風の姫は生き生きと語っている。初恋の瞬間を語るように。

『その時のエンは戦闘経験ゼロでした。無残にも倒れましたが、エンは立ち上がりました。何度も何度も立ち上がり、そのたびに眼が真紅に染まるのですよ。兵士はそれに気づいていませんでした、調子に乗ってエンの弱点を言ったのですよ、その瞬間からエンは己の能力を知り、いたぶりながら兵士を食べてしまいました』

最後の一言は悲しそうに風の姫は言った。

同時にエリアには妙な違和感があった。一番最初は自分では無いことを悲しんでるように聴こえたのだ。

それ以上は訊かなかった。訊けなかった、その後が恐ろしくて…

…

「ひいーめ！！ あたまなでなでして」

だがエンはそんな事を感じさせないほど明るい笑顔で風の姫を愛する。

ドアを突き破ってきたり、影から瞬間移動してきたり、城壁から登ってきたり。

エンは激しく風の姫に心を奪われている。

そして、エンの敵は多い。己の運命を変える力で、ディスト・アウターの力で敵を呼び寄せてしまう事もある。

だからエンは平和を感じたことが無い。

それはエリアも同情できた。

家族がいなくなったあの日は思い出すだけで気分が悪くなる。

だけど今だから思える疑問もある。さっき見たガイルの顔と両親を殺した魔族の顔が不一致なのだ。

少年という点は変わらないのだが、あの魔族の顔は白い髪で紅の眼をしていたのだ。

身長もガイルよりも低く、エンのように人を喰っていた。

だがエンにはアリバイというものが存在する。長い間、封印されていた彼が出来るわけが無い。

エンは幸せそうにエリアの膝の上で寝ている。エリアの体を使って風の姫はエンを撫でていた。

『退魔士の私に言っておきますが、エンを殺して良いのは私だけです。これはセアラお母様から直々の命令でありますから』

それはどうということ、命令なんて……。

『エンは世界を手に入れようとはしました、また手に入れようとするならこの私が……エンを殺します』

愛する人を止めようとする声だった。

エリアの父も似た強さを持って最期を迎えていた。守るべき者の為に全力で戦い、そしてこの世を去った。

出会いがあれば別れもある。

いつもエリアを締め付けている現実。そして世界のルール。

運命なんて大嫌い……。

たった一つのエリアの嘆きだった。

幸せは永遠に続かない01

幸せは永遠に続かない01

魔界に来て2カ月が経とうとしていた。

恐怖の料理にも耐性がついたエリア、だが自分で料理をしている、材料は森からだ。

無論、エンもついて来ている。そうじゃなきゃ今度こそガイルに殺される。

風の姫は余裕に満ち溢れた声で、同じ手は二度も通用する方ではありませんからね。

と明るく申していた。

「わーい！！ ステイルの実だ！！」

エンはドングリに似た木の実を採っている。エンが採るのだから毒は無いと思いつながら採集していく。

この森は自分達の世界の森と非常によく似ている。同時に危険なものも存在する。

魔界の森には魔獣たちや危険な植物などが多く存在する。

しかし、魔界全ての魔獣たちが危険なわけじゃない。肉食が目立っているだけで安全な魔獣もいるのだ。

だが魔獣たちはエリアの前には現れない。正確にはエンがいるから出られない。

エンは魔界の創造主だ。エンは魔王であり魔神の類でもあったのだ。

異質な空気を出しているエンに近づこうとする魔獣は一匹もいなかった。

この森で魔族ですら死ぬ事がありえるのに、安心してこの森にいる少年。

エンは獣のように木々を跳んだり、走り抜けたり、泉に跳びこん

で泳いだりしている。

右手のバスケットには山菜が沢山入っている。城からくすねてきた鍋で山菜鍋をつくる。

今のところこれぐらいしか作れない。退魔士の時もこんな感じだったと思い出しながら包丁の代わりにテラス・セイバーで材料を切る。

きっとロードさんが見たら悲しむかなあ……？ と疑問系な事を考えながら魔界の魚類をさばっていく。

エンが陸にあがり、エリアは材料を鍋に入れて煮込んでいく。

おいしそうな匂いが辺りに広がり始めて、エンが高速でつまみ食いをするが荒々しく開け閉めしたことでエリアが気づきエンに注意する。

完成した山菜鍋を二人で美味しく食べる。

エンはとても気に入ったの全部食べつくしてしまった。

頬を嬉しそうに紅潮させながらエンはまた材料を探りに行ってしまった。

次の味付けの事を考えながらエリアはテラス・セイバーを研いでいた。

『そういえばエンに言っておく事を忘れていましたわ』

何を言い忘れたの？

エリアの質問をスルーして風の姫は計算し始める。

『エンの体重は確か……21kgほど……まずいですわね……』

だから、どうしたの……！

エリアが心の叫びがやっとお姫様に届いた。

『エンは人間の食手法では体重分食べるのですのよ……』

噂をすれば影がさす。エンはエリアの周りに色々な食料を持ってきて置いていた。

どうすればいいのよ……。

目の前には山ほどの自然の恵み。だが人間が食べる量ではない。

『……私がエンの為に頑張りますから、退魔士の私は寝ていてくだ

さいな……』

そうする……。

エリアは虚ろな目つきで就寝に至った。

次の日にはエリアは疲労感で動けなかった。

いつも元気なお姫様は朝から一言も発していない。

苦労して育ったと思われる風の姫はエンの為に21kgほどの料理を作ったみたいだ。

好きな人の為に頑張れる人もいるが肉体的限界は誰にでも存在する。

気だるさを感じながら朝からエリアは眠った。

幸せは永遠に続かない02

幸せは永遠に続かない2

「まったく何故この私が長老殿のもとへ行かなければいけないのですか？」

風の姫は相当ご立腹であった。

馬車に揺らされてもう3時間が経とうとしている。エリアはその長老殿は知らない。

エンから聞いている限りでは、女神 セアラを魔族で唯一見た魔族らしい。

同時に女神がエンの事を託した魔族である。

アルザックの部分はその魔族の名前だそうだ。

どうしてそんなに会いたくないの？

ふと思いついた事をそのまま言ってしまった。

風の姫は怒号の声で叫びとうした。

「何を言っているのですか、退魔士の私！！ 長老殿は私の事を嫌っていて、尚且つ私が攻略不能の手練なのですよ！！ あの方ならいつ私を殺しに来るのか分かりません！！ そして巧みに私を呼んだのですよ！！ エンには婚約者を見たいから連れてきてくれ、な」とほざいて。あの方の狙いは私ですこと

まだまだ吼える姫を無視してエリアはため息をついた。

通称、長老さんからエンに手紙が来た。

内容は風の姫と会いたいというもの。エンは育ての親である長老さんを断る理由も無く、笑顔で了解した。

それをリンから聞いた風の姫は青ざめてこの調子である。

しかし、エリアは思った。

シユウと同じく溢れ出したら止まらないタイプなのかと……。

徐々に影の一族の村に近づいてきた。

エンは影のお爺ちゃんと会えるう！！ と喜んでいたが、風の姫は馬車から脱走しようとは何度も挑戦している。

リンの転移魔法に頼れば一瞬で影の一族の村に行くことが出来るが、それはエリアが許さない。

あの女は友好的に接してくるがエリアにとっては敵同然。

魔族は親の仇なのだから……。

それだけじゃない。退魔士として活動している時だってそうだった。

色々な村や町を旅した。そのたびに見てきたのだ。

人の血を、

かつて、幼き少年を魔族から助けた。

ただどはつきりと言われてしまった。

なんでもっと早くに来てくれなかった、と。

どうしようもなかった、もっと私に力があれば、自分が弱すぎる所為だ、

何度も自分を責めた、朝日が昇るたびに泣いた、そのたびに強くなった。

だから一日でも早く魔界から去りたい。

突然、馬車が止まった。

どうやら到着したようだった。だから、風の姫は恐怖の悲鳴を上げ続けた。

体の主導権はエリアにあるが、たまに風の姫がテラス・セイバーを抜きそうになる。

先に来ていたエンは輝く笑顔でポロポロの家の前で待っていた。

「姫、肩から力を抜いて。じゃあ開けるよ」

エンは手加減せずに思いつき扉を開けた。

「お爺ちゃん久しぶりいいいい！！」

「ほっほっほ、エンいつもと変わらないのお」

老人は異質な匂いを漂わせながら、エリアを待っていた。

真つ白いふさふさな髭を触りながらエンの頭を撫でている、長老。『退魔士の私、よくこの魔族を知っておいてください。この影の一族の長、いえこの一族の総称はファントム。闇の者でありながら光を力とする矛盾した一族。ファントム達が本気を出せば神の一人は殺せる実力を誇る者達ですよ』

風の姫はこの家の中で一番怯えていた。化け物の前にいる人間のように恐怖していた。

長老はイスにもたれかかりエンと話している。そして老人の右手で持っている杖、あれはリンが持っていたドクロの杖と同じ物だった。

「ほっほっほ、エンすまないが席を外してくれないか？ エリアのお嬢ちゃんと二人で話したいののお」

「いいよ!!」

風の姫が静止の言葉を言う前にエンは出て行ってしまった。

かなり絶望に落とされたお姫様、いつも一枚上手のお姫様が極度に怯えている。

「ほっほっほ、風の国の姫、そう警戒するではない、ワシはぬしらの婚儀は認める。今日は退魔士に話があるのだ」

風の姫は噛み付きそうな勢いだ。

「信じられません!! かつて何度も殺しに来たではありません」
長老は風の姫の口を人差し指一本で閉ざした。

たったそれだけの行動で姫は黙り込んでしまった。

「あまりワシを本気にさせるでないぞ小娘、ワシはエンの好きなようにやらせるつもりであるが、我慢ならない事もあるのでお」

喜怒が入り込んだ口調だった。

魔族特有の殺意を一瞬だけ膨れ上がらせて、最後は普段の態度で言う。

ついでにエリアもびびってしまった。風の姫が会いたがらない理由が良く分かった一瞬だった。

「エリア・オーシャンお主は何故、魔族を嫌う。ワシは全ての影を統べる存在である故に影を通してほとんどの真実は知っているつもりだったがのぉ、お主が風の姫の来世ある事や世界の守護者の動きに、エン何故が風の国の姫を追い求めるか全く知らん。ワシは真実が知りたいそれだけじゃ」

エリアは今までの事を話した、エリアの首を絞めるような苦しみを感じたが、この魔族なら話してもいいと思えた。

長老はロードのような暖かさが感じられたのだ。

「なるほどのお、エンのように人を喰らう白髪に紅い眼の少年か…これまた変わった真実がきたのお、まあ調べておいてやるかのお。今日はすまなかったのお、機会があればまた来てくれ」

風の姫は歓喜に震えていた。相当神経を使っていたはずだとエリアは思った。

この村に来た時から少しの風にも警戒していたから……。

「では失礼します」

エリアはなるべく丁寧な動作で家から出た。

エリア達が帰った後、長老の後ろから二人の若いファントムが現れた。

「いいのですかアルザック様」

「まともにガイルとも戦うことも出来ぬ若造が政に口を出すな！！」風の姫に警告したときより重い声で長老は言った。

その圧力に圧倒されすぎて二人とも何も言えなくなってしまった。「ワシらのような才能の無い者は努力と経験と運でしか天才に勝つ事は出来ぬ、実際にガイルは力も劣る風の姫に負けている」

まさに事実、ファントムの長 アルザックは真実を追い求める。

「エン様のような天才とまともに戦う事の出来る聖王は努力と経験と知識と運で戦う、口を動かす暇があるなら努力しろ」

幸せは永遠に続かない03

幸せは永遠に続かない3

「……………あの……………大丈夫ですか？」

天使の少女が恐る恐る尋ねてきたが、俺はそれどころじゃない。

「大丈夫なら俺は魔王の城に突撃してる」

何で肝心な時にラッキーとやらは手助けしてくれないんだろうね。俺が竜巻に飛ばされて影の一族の村に落とされた。そこからは逃走の始まり、そこをこの天使に助けてもらった。

だけど、この天使の所為で空中に出ってしまった事を忘れてはならない。

森の中でファントム達から逃げているけど長老とやらが動き出したら逃げられないと天使さんがビビりながら話してくれた。

しかも、この森は魔獣達の棲みか。天使さんはライド様がいれば……………と何度も言っているどこまで弱気なんだ？

エリアみたいなタイプに慣れ過ぎてどういう対応をすれば良いかわからんぞ。

「きみは何か武器は他にないの？」

「……………今回は魔界に来る事を予想してなかったの、この剣しかありません……………ごめんなさい……………」

ちなみに、この天使さんは魔法を使えないそうだ。……………俺……………アイツの城に辿り着けるのか？

今の問題は食料だ。魔界の食べ物なんて俺は知らんぞ！！

急に立ち上がった俺に天使はびっくりして後ろの木に背中をぶつける。

「ど、どこ行くんですか！」

「ちよっと食い物探し」

コイツの顔を見ているとエリアを思い出す。俺とエリアは退魔士

の教会で始めて会った。

俺もエリアと同様に親がいない。教会の前で倒れていたそうだが、それから退魔士を目指す事にして進んでいる途中にエリアとタッグを組んだ魔族討伐訓練。

ほとんどをエリアが斬って終わらせてしまった。

退魔の銃を撃とうとするとエリアが邪魔になって発砲出来なかった。

その後から、遠征から何から何までエリアと一緒にだった。

教官曰く、お前以外アイツを止められそうな奴はいない、だそう
だ。

何でもかんでも一人でやろうとするエリアを見ていたら吐き気してきた。

どうして自分の命を大切にしない？

2人部屋のときにエリアと同室だと聞かされた時は外で寝ようかと思った。

だってアイツあの時、いつも聖剣を磨いでる目、鋭すぎるんだぞ。テラス・セイバーは窓に干してあるし、短剣は床に刺してるし、部屋の中で普通に魔法の研究して屋根を吹き飛ばすし。そして、その後に必ず俺が叱られる。

何で止めなかった！？ はい、その時は補習で外周していました。そして深夜になるとエリアは決まった寝言を言うんだよ。

お父さん、お母さん、死なないで……、偶に泣き叫ぶから後日の訓練には足を引っ張りまくった。

だけど、その言葉を聞いてからか。俺は彼女を助けようと思い始めた。

ライド神父からエリアの過去を聞かされた時には本格的に思い始めて、

退魔士として戦う時には中々のコンビになっていた。

ああ最強になりたいよ、エリアを守るほど強大な力がね。

そんな事を考えられながら俺は進んでいった。

エンとシュウ

私室でエンは書類に承諾やら否認や、報告書などに目を通したりしていた。

今日は風の姫のところに行く日ではない。これも文武両道では無いが、これも政務も日課の一つである。

太陽は天高く日を差している、先程から炎が見えたが気にしない。ガイルが姫に攻撃を加えるのは知っているし、それに今のガイルが姫に勝てない事も、殺せない事もエンは分かっている。

鼻歌を歌いながら筆を進めていくエン。その声を扉越^{くわ}しでリンが聴いている事も分かっている。

エンにとって、やはり風の姫が近くにいるのは凄く心地の良いことだ。彼女さえいれば何も要^いらない、そう思えるほどに。

だが裏を返せば彼女がいなくなれば、エンの全てが無くなるに等しい。

かつてエンが魔王として成ったばかりの頃で、全てを拒絶していた時期のように。母から引き離された幼子のように。

「どうしよう喉が渴いちゃったな……」

呟くように、召還の呪文を唱えるように、リンを呼んでみたエン。すると待つていたと言わんばかりの速さで扉が開き、リンが紅茶を運んできた。

「エン様、ミルクティーが良いでしょうか？ それともレモンティーが良いですか？」

「じゃあ今日はミルクティーが良い！！」

リンがカップに注ぎ終わると、エンは飲み干し満足げに笑顔を浮かべる。そんな時に扉がノックされた。

扉の向こうにいる人物が入る前にエンはリンに囁くように言う。

「……リンお姉ちゃん、ちょっと席を外して……」
ちよつとガツカリするリン。しかし彼女は影の転移魔法を使って、部屋から出た。

「はいつて良いよ」

「失礼しますぞ、主」

入ってきたのは黒騎士だった。今回は黒い鎧ではなく、セアラが創造した世界で現在使われている銀の鎧だ。

「今日はどうしたの？ いつもより機嫌が良さそうだし」

「ええ、期待の者が魔界に来ていたのですよ。かの少年はどれほどの腕で、我に立ち向かうかが楽しみなので」

つまり新たな人間が魔界にいる、という事だとエンは理解した。

しかし、エンの嗅覚で感じる限り脅威まで感じる人間は今のところ、世界の守護者だけだ。

勇者などと名乗っていた人間もいたが、ハツキリ言って手応えの“手”も感じなかった。

だが、今のエンなら確実に苦戦を^{しいた}虐げられる。

五歳児の体でしかも《神の力》を使うにしても、魔力も、応用の展開力も足りない。

「……やっぱり、僕の半分も見つけないといけないのかな……？」

小さく呟くエン。元々、エンにかかった呪いは一個の存在全てを消すものである。

しかし呪いの濃度を薄められては意味が無くなる。風の姫は自分の存在も消えるかもしれないのに、半分だけ受け止めてくれた。

その結果にエンと風の姫の魂は半分に分けられ、能力も格段に落ちたしエリアと言う存在が生まれた。

全てを一つにしたいとも、風の姫はエリアの事を気に入っているし、エンの心の半身はどこにいるのか分からない。

今、やるべき事は力を蓄えることか……と、一人頷くエン。

「報告、ありがとうお兄ちゃん！」

「いえ主の為にやるべき事をしたまです」

黒騎士が頭を下げたタイミングで、エンの思考がフル回転した。人間、エリア、運命、半身、匂い、才能、白い自分と対なす少年色んなワードが飛び交いエンに答えを導き出す。

「黒騎士のお兄ちゃん。さっき言った、その魔界に来た人間って、戦い方はどうだった？」

何をいきなり言いますか、と驚きの目を睜る黒騎士。しかし、すぐに冷静に黒騎士は答えた。

「かの少年は戦闘の知識は少ないですが、土壇場の閃きや、応用能力は天才でしょう」

ニヤリと唇の端を吊り上げるエン。人は言う、何かを企む顔だと。「僕ちよつと町の者達に会って来るね」

そう言っただけでエンは私室から消えた、風の姫と永遠を手に入れるために。

終焉のエン、終わりのエン、永遠のエン、この世界に終わりを迎えさせるはエンなのか、それともディスト・アウターなのか？

「小僧、人間としても退魔士としても実力は最高じゃが……一歩足らんのお」

影の長老とやらが俺らの搜索に本腰を入れ始めて20分も経たない内に天使は気絶してるし、俺もノックダウン寸前だ。

「じじいには……関係、ねえだろ……」

血を吐きそうになる衝動を堪えて弾を込める。

「退魔士の小僧よ、目上の者には礼儀は大切だと教わらなかったのか？」

影から無数の手が現れて俺の腹に一撃を決める。そして最後の一発も撃てずに退魔の銃は森の中で見失う。

天使がビビツてた理由が分かった。

コイツには攻撃が届かないのだ。銃で撃とうが影の手が邪魔に入り、必死に斬ろうとするが数にやられて殴られる。それが延々と続く。

それにしてもかなりの堅実派だ。常に一定の距離をとる長老の姿は黒騎士のように俺は見えた。

しかもまだ、発動してない魔法か何かがあると……予測できる。

コイツが一撃を使わない理由は恐らく確実に仕留めたかどうか知る為であろう、狩猟される動物の気分が良く分かる瞬間だ。

「……光と闇、二つはア、……表裏一体……風と交わり全て……」

「詠唱を全て言わすと思っているのか？ 小僧」

濁流のように流れてきた無数の手。俺は流されて木に激突する。

出血しすぎて、立つ事すら危うい。ビリビリと体中に痺れと痛みが流れ込み、感覚が不明瞭になり始めた。

俺がもつと強ければ、このジジイよりも魔王よりも強ければ、エリアを守ることなんか容易いのに。

口の中にある血を噛み締めて立ち上がるが、すぐに転ぶ。

「黒騎士は残念がつとるじゃのお、期待の新人がこんなではのお
立ち去ろうとする長老。ざけんじゃねえよ、まだ決着は

『すでに決まっているだろう、お前の負けだ。そして死だ』

大人びた青年の声。俺は反射的に答える。

「俺は、まだ死んでねえ……」

その答えを聞いた声は、確かに言った。

「貴様の願いは何だ？ この長老を殺すことか？ それとも、かの少女を手に入れ我が物にする事か？ また、全てに終わりをもたらず神になることか？」

俺の願いは……

「今は勝ちたい、エリアを護るだけの力で良い！……」

「よかるう、魔族の全てを統べるほどの力を授けてやる。余は、我は、否、俺は、貴様にシュウ・トライドに授ける」
天上から俺に向かつて一線の光が舞い降りた。それは聖なる輝きではなく、黒を帯びた白く邪悪な光とも言えた。

後ろを振り返る長老。

そこには先程まで甚振り多量出血で死んだ、又は戦闘不能にしたはずのシュウが立っていた。

白く煌く髪に、全てを見通すような紅き眼、そして右手は光の粒子のように輝いている。

「貴様だったのか？ エリア嬢が話した化け物は」

シュウは自分の姿は確認したが、何も言わず淡々と詠唱し始めた。

「大地を引き裂く力、それは心の闇と希望の光なり。闇と光、交わる事なき二つの力、合わせて全てを抹消せよ」

シュウの立つ場所を中心とし、巨大な魔方陣が半径十キロほど浮かび上がる。

通常の間人がこれほど大規模な魔法を一人で出来るはずが無い、そして、今使っている魔法はエンが世界の守護者と戦った時に使用した魔法だ。

威力は絶大、生きる物を消し去る程の力はある。長老ですら、タダでは済まない。

「くツ、引くしかない」

光の奔流が森全体を覆いつくすと、木々も魔物たちも存在しない、寂しげな朽ちた荒野になった。

その中にたった一人だけ立ち尽くすシュウ。彼は声を荒げて咆えた。

「お前がエリアの家族を殺したのか！！」

声の主はさも当然のように、答えた。

『確かに。我は、かの者たちは我が喰らった』

それを聴いた途端にシユウは声の主の胸倉むなぐわいを掴んだ。目には見えなくとも、感覚で嗅覚で直感で分かる。

『我を殺すか？ 今のお前では私の半身すら倒せない、それで少女を救うと申す気か？』

「ああ、俺は俺の欲望に従うまでだ」

それを嘲笑うように声の主は真実を告げる。

『貴様は虫けらだ。虫けらが大義名分を掲げても、誰も聞いてくれないぞ』

シユウは思いつきり声の主を殴った。そんな事は嫌と言うほど分かっている、とは言わずに。

『あの堕ちた天使から教わらなかったのか？ 力無き思いは戯言にしか成らず、思い無き力は己を滅ぼすと。貴様は前者だ、思いばかりで力が無さ過ぎる。あの少女は思いを貫く“力”も、復讐を達成させると言う“思い”も存在する、例え闇に堕ちても。貴様にはそれが全く無い』

手に込めた力を緩める事無くシユウは声の主に問う。

「お前は何者だ？ 俺に何をさせようとしてるんだ？」

それに声の主は、

『俺は、エリア……、否、いな風の姫と共に永遠を手に入れたいだけだ

……』

寂しげに、悲しげに、声の主は答えた。その時に、声の主の姿がシユウの目に映った。それは自分とよく似た姿と顔をした、青年だった。

白髪に真紅の瞳、王族のような装飾品が付けられた衣、腰にある大きな剣は王者のような品格を感じさせている。

そして、彼はとてもやつれていた。今にも倒れそうなくらい、青い顔をしている。

「……お前……」

『神とて何もしなければ死ぬさ。残りの寿命も僅かと言えよう』
青年の左手はガラス細工のように透けていた。触れば今にも砕けそうだった。

シユウはすぐに先ほど青年が言っていた事に訊く。

「おいお前さつき、エリアが姫だとか言ってたな。説明しろ！」
藁わらをも掴む勢いで青年を揺さ振るシユウ。色々と嫌な想像が駆け巡る。

例えば、エリアを取り返すためにチビツ子大魔王と戦わなければならぬ、とか。二人でエリアを取り合う、など。

『退魔士エリアの前世が、風の国の姫だ。その心は俺が生きるように《引継ぎ》の力を使って残っている。エリアの体の中に姫もいると言っ事だ』

そういう事かと、納得しかけて、いや違うだとブンブン頭を振るシユウ。青年はシユウが口を開く前に再び語り始めた。

『シユウ・トライド……俺の僅かな《神の力》を貴様にくれてやる、代わりに俺を半身のところへ連れて行け』

それは悪魔の囁きであったのだろうか、魔王の囁きであったのだろうか、シユウが頷くと同時に彼の運命は大きく狂いだした。

エンとシュウ（後書き）

前々から不規則更新だったので、高校受験が近づいてきました。さらに更新が遅れるかもしれないですが、ご了承ください。お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8694s/>

ディスト・アウター 退魔士の少女と魔を統べし少年

2011年10月3日03時29分発行